

自由律俳句を味わう

首藤 静夫

当クラブの教室で「有季定型」の俳句を学んでいる。五七五の型を基本とすべし、季語を入れるべし――。

この約束事に拘らないで自由に作るべしとする「自由律」俳人が少数ながらいる。代表が種田山頭火と尾崎放哉である。

分け入っても分け入っても青い山

どうしようもないわたしが歩いている

うしろすがたのしぐれてゆくか（以上山頭火）

咳をしても一人

入れものが無い両手で受ける

墓のうらに廻る（以上放哉）

短い五七五の、さらにサビ部分を抽出した感じだ。特に放哉のは削ぎ取られた切迫感がある。五七五の型にはめるとどこかでユルミが出ダしてくる。助詞や「や、かな」などで調子を整えるのでその分ゆるくなるのだ。自由律を試して見た。

雪の下三月青く生まれける しずを

↓雪の下三月を見つけた

春一番ポニーテールの打つシユート しずを

↓ポニーテールが蹴りこむ青春

これは俳句か一行詩かキャッチコピーか、ただの独り言か。迷った時にどこに戻ればいいのか分らない。自由に、とは難しいものだ。型があるからこそ、ある程度自由に振る舞える。五七五がなくなったら自由律だなどと言ってをられまい。本家を長男が守っているから、二男はのんきで居られる。

山頭火も放哉も事情は違うが各地を独りで転々とし、その時々的心境を句に詠んだ。堂守をしたり、一燈園で暮らしたり、雲水行脚をしたりと孤独、貧困の一生だった。師は二人とも荻原井泉水で、彼の主催する俳誌に投稿し、生活の面倒も見て貰ったりという関係だった。山頭火も放哉も恵まれた出自で、その分自我が強かったようだ。

二人の句は、いわゆる「客観写生」とは異なり、自意識が強く作用している。この俺様が何故こんな哀れな境涯を生きなければならぬのかという思いに裏打ちされた句が多い。

そんな主観的な作風に共鳴する人が多いのも面白い。哀しみを吐き出す表現力の強さというべきか。真剣に面倒を見た井泉水の方は、二人の陰に隠れてしまい、苦笑いしているだろう。